

# 読賣新聞

2011年(平成23年)

7月7日 木曜日

しょうしょ  
小暑

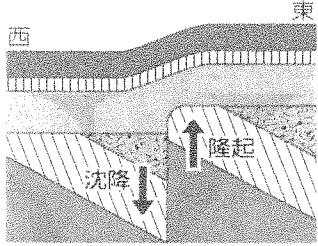
## 立川断層帯地震確率高く

### 政府示唆 明確な数値は示さず

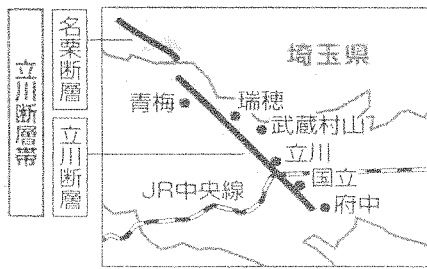
政府の地震調査委員会が6月、東日本大震災の影響で、「立川断層帯」の地震発生確率が高くなった可能性があると発表した。専門家は「やみくもに怖がる必要はない」と冷静な対応を求めているが、明確な数値が示されたわけではない。そのため、周辺住民の間に不安が広がっている。

(前村尚)

立川断層帯の断面図(イメージ)



立川断層帯の位置



「立川断層帯はどこを通る丈夫か」。6月9日の「ついでに」の「うちは大調査発表翌日から、立川市防災課には、市民からの問い合わせが相次いだ。窓口へ直接、訪れる市民の姿もあり、7月1日までに相談件数は、約100件にのぼった。

埼玉県飯能市から立川市などを通して、府中市に延びる約33kmの断層帯で、「名栗断層」と「立川断層」と呼ばれる二つの断層で形成していると考えられている。調査委は2003年、「今後30年以内にマグニチュード(M)7.4程度の地震が起きる確率は、0.5〜2.0%と算定した。

だが、今回は確率を出さなかった。文部科学省の地震調査研究推進本部によると、東日本大震災後、日本の陸地が東西方向に伸びてしまい、この地殻変動によって「断層帯に加わる力」がどう変わったのかを調べる必要があったからだ。

国土地理院によると、全球測位システム(GPS)のデータから、牡鹿半島(宮城県)の位置が東南東に5.2.0%がどれくらい深刻なのか。調査委では、一般的な事例として、自宅が30年間に「台風の被害を受ける確率(0.48%)」や「火災にあう確率(1.9%)」と同じようなレベルだと説明する。

マグニチュード 地震が出すエネルギーの大きさを示す値で、地震の規模がわかる。マグニチュードが1増加するとエネルギーは約32倍に、2だと約1000倍になる。一方「震度」は、ある場所での揺れの強さを表す。

調査委のメンバーで立川断層帯を初めて専門的に研究した首都大東京の山崎晴雄教授によると、国は掘削調査や文献から、最後に地震が起きたのは約2万5000年前で、立川断層帯は約1万5000年前に1度しか活動しないと推定しているという。

山崎教授は「数千年以内に活動するのは間違いない」と話す。多摩地区の地盤は揺れに強い泥岩や砂利の層があり、壊滅的なダメージは受けにくいとみている。